



TITLE:

フィジオクラートの労賃論と『純収入』

AUTHOR(S):

森, 耕二郎

CITATION:

森, 耕二郎. フィジオクラートの労賃論と『純収入』. 経済論叢 1927, 24(1): 144-171

ISSUE DATE:

1927-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128493>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第

卷四十二第

行發日一月一年六十正大

租税の目的と實體

教授 法學博士

神戸 正雄

再マルクスの社會的意識形態について

教授 法學博士

河上 肇

土地の非資本的性質に就て

教授 法學博士

河田 嗣郎

徳川時代の農民逃散

教授 經濟學士

黒 正 巖

經濟學の根柢をなす公益的精神に就て

助教授 法學士

石川 興二

露西亞の産業組合運動

助教授 經濟學士

八木 芳之助

フイジオの勞賃論と「純收入」クラートの

講師 經濟學士

森 耕二郎

日支通商航海條約改正について

教授 法學博士

末 廣 重雄

國庫預金制度と兌換券發行高との關係

助教授 法學士

汐 見 三郎

武士階級の窮乏

教授 經濟學博士

本庄 榮治郎

家族統計概論

教授 法學博士

財部 靜治

海運勞務の提供に要する原費

教授 經濟學博士

小島 昌太郎

琉球と慶長役

教授 法學博士

山本 美越乃

フィジオクラートの勞賃論と『純收入』

森 耕 二 郎

目 次	一 序 説	二 フィジオクラートの先驅者の勞賃論	三 フィジオクラートの勞賃論	四 フィジオクラートの『純收入』	五 結 語
-----	-------	--------------------	----------------	------------------	-------

一 序 説

事物の本質の闡明、その統一的全面的把捉は、それが變轉期に於て最もよく所期され得ると云はる。果してさうであらうか？ 我經濟學發達の跡を顧みる時、亦同様のことが云はれ得るであらうか？ フィジオクラート學派がその偉大なる學問的體系を以て我經濟學の歴史の上に横はつてゐるのはこの理に本づくのではなからうか？ 當時は封建的社會の崩壞、近代資本家的社會生誕の初期、の變轉期に在り、たゞひ經濟諸現象の本質を深く究明するに至らなかつたにしても、何人も比較的になほ克くそが現象を全體性に於て把握し得たのである。

フィジオクラートを論ずるもの、多くはその經濟表、自然法觀を問題とする。そしてそれは正しいであらう。けれども經濟表——財（資本）の循環の前提たるどころの彼等の資本家的生産關係の分析も亦吾々の注目値するに拘はらず、それを問題としたるものは必らずしも多くはない。

こゝにこの問題を取上げて見るのも強ち徒勞ではあるまいと思ふ。

問題の所在は左の如くである——(一)フイジオクラートは近代資本家的社會に於ける勞働(力)の價值、勞賃の本質を如何に規定、説明したか(それは資本家的生産分析の出發點である)、(二)而して彼等は、彼等の勞賃説に立脚、それから出發することにより、その純收入(Product net)の説を如何に展開したか——勞賃、賃勞働と純收入(剩餘價值の一形態)、資本とは、各々の本質を相互に規定し合ふ、お互に他方を離れてその本質は規定せられ得ない。それらは統一的全體を構成する對立物であるから——(三)かくてこの二つの基本的理論を相關説明することにより、彼等は當時の資本的生產——封建的外彼になは多分に蔽はれてゐたところの——の本質的關係を、如何なる程度に於て、統一的に分析解剖し得たか、即ち(a)右の諸點に關する彼等の功績および欠陥、矛盾如何、(b)その歴史的必然性、(c)彼等の學説の矛盾の社會の歴史的進行に於ける役割如何——私はこれ等の諸問題を不十分乍ら左に問題として見たいと思ふ。

凡ゆる經濟學説はその當時の經濟事態の思维的表現である。随つてその學説の價值如何を評價する場合、評價の基點は云ふ迄もなく現代社會に於ける吾々の評價認識であるけれども、それが生起の必然性はあく迄もその各々の歴史的時代に求めなければならぬ。フイジオクラートの勞賃論、純收入説、及びそれに本づく資本家的社會の分析が長所を有つと同時に、如何に不十分なる所、矛盾せる所を有つにしても、それは當時の經濟事態の必然であり——いつでも事物の、經濟現象の完全なる批判はできるものではない——随つてそれは又歴史的に自然であると云へるかも知れ

ぬ。更に又彼等の學說の矛盾そのものが、彼等の意思に反して、その歴史の必然的進行を促進したかも知れない。吾々は以下の研究に於て常にこの批判、評價の態度を忘れないであらう。

一　フイジオクラートの先驅者の勞賃論

フイジオクラートの經濟學は第十七世紀の後半佛蘭西の地に於てケネーを中心として諸々の學者によつて大成せられたるものであるが、その先驅者として既に英國に於てベティ、ロツク、及びノースなど有力なる學者があり、佛蘭西に於てもボアギユキペール、カンチヨーンの如き學者が輩出し、マーカンチリズムに對する批評に於て、各々フイジオクラート經濟學の先驅を成したものである。さうして商品交換の原理、諸經濟現象の本質はこれらの學者により不十分乍らも甫めて正當に究明せらるゝに至り、資本主義經濟學はその生誕をこれらの學者に於て見出すに至つたものであるが、勞賃論に就ても亦同じく、これらの學者に於て、極めて斷片的粗架の形に於てはあつたが、近世經濟學の正統的な勞賃論の萌芽が見出されるのである。フイジオクラートの勞賃論——『純收入』觀を吟味するに先達ち、私はフイジオクラートの先驅者、即ち近世經濟學の創始者の主なるものに就て、この種の勞賃論が如何に取扱はれてゐるか、そしてそれによつて近世資本家的生産關係の本質は如何に分析解剖せらるゝ所があつたか、を若干詮索して置きたいと思ふ。

近代經濟學の建設者にして最も天才的獨創的な經濟學者の一人である云はれ、商品の交換

價值、使用價值の決定について創めて正しい概念を經濟學に導入し、以て資本制生産方法の内部的關係を闡明するに先鞭をつけたところのケリアム・ペティに於て、すでに早くこの種の勞賃論の片鱗を窺ふことができる。彼はその著『租税および貢納論』に於て左の如く言つてゐる。

『さて若し勞働者の勞賃その他は、貨幣が騰貴するも少しも騰貴してはならぬと聲明せらるゝならば、このことはたゞかゝる勞働者に對する租税と同じやうに、彼等の勞賃を半減せしむるに至るであらう。かゝることは勞働者が今迄の勞賃の半分にて生活することができればいざ知らず（それは想像し得られない）、實に不正なるのみならず、不可能のことである。蓋し勞働者は丁度生きて行けるだけの生活資料を得べきである、といふ勞賃決定の法則は、かゝる場合、駄目となるであらうから。その故に汝が二倍丈け多くのものを與へるならば、勞働者は爲すことができ、そしてさうでなかつたならば爲したであらうところの半分丈けしか働かないから、さうしてこのことは、公共に對してそれ丈けの勞働の事實の損害となるであらうから。』

更にジョン・ロツクはこの種の勞賃論を諸々の實際的問題に關聯して開陳してゐる。今ロツクが勞働者の課税問題に關聯してその勞賃論を述べて居る所を窺んに、彼に依れば、若し勞賃が究極する所勞働者の最低必要費の水準に歸すべきものなれば、勞働者に對しての課税はそれ丈け勞賃の引き上げを招來し、結局それは雇主、地主の負擔となるものであつて、勞働者は負擔するところがない。しかるにその反對に勞働者の勞賃は常に必らずしも最低生活費に限らるべきでないとするれば、勞働者に對する課税は勞働者に依つて負擔せらるゝことが可能である、といふのであ

1) Petty, W., The Economic Writings of Sir William Petty, ed. by Hull. C. H. Vol. I, p. 87.

る。この問題に關してロックは一六九二年に出た所の彼れの一著に於て左の如く述べてゐる。

『貧困なる勞働者や職人は四分の一を負擔することができない。何故なれば彼等はすでにその日暮しの生活をしてをり、凡ゆる食物、衣服、家財の價格は以前より四分の一方高くなつてゐるから、彼が生きて行くがためには、彼れの勞賃は貨物の價格に伴うて騰貴するか、或は勞働者は自分自身と家族とを養ふことができずして、教會區に救助を求めねばならぬことになるであらうから。かくて結局土地がこの負擔をより、悪い方法で擔ふことになる。』¹⁾

なほこの種の勞賃論をかなりに秩序的に、而も歴史的事實に即して、論じたるものとしてカンチョーンを擧げることができらうであらう。彼れの勞賃論がアダム・スミスにより隨所に引用せられてゐることはよく人の知るところである。今彼れの主著『商業性質概論』²⁾を持ち合はせないの³⁾で、彼れの勞賃論の内容を細かに紹介するに由がないが、彼に依れば、貨物には内部的價值と市場價值とがあつて、後者は久しきに亘つて前者より離るゝことができず、いつかはそれに一致するに至るやうに、勞働(力)の價值にも内部的價值と市場價值とがあつて、いつかは兩者は一致するに至る約束がある。さうして勞働の市場價值は一時的偶然的なる勞働の價值であるが、その内部的價值は、勞働者は最小限の二人の子女を育て上げねばならぬから、尠くとも勞働者自身の生活資料の二倍に當らねばならない(妻は子女の養育にその勞働を過半をとられてしまうから、自分の勞働は丁度自分の生活資料を稼ぐに過ぎない)。

以上紹介したところの勞賃論は、その間に精粗の差はあるが、ともに勞賃は勞働者の生活資

- 1) Locke, J., Considerations of the Lowering of the Interest etc., 1692. (The Works, p. 597) なほ "For the labourer's share, being seldom more than a bare subsistence," の詞も見える。ibid., p. 607.
- 2) 一例: Smith, A., Wealth of Nations, Cannan's ed. Vol. I, p. 70.
- 3) Cantillon, R., Essai sur la nature du commerce en général, 1755.

料、若くはその價格、に歸着すると云ふに外ならぬものであつて、後世幾多の生存費説、勞働(力)再生産費説は皆その泉源を茲に見出すと云ふことができる。それは洵に彼等の功績としなければならぬであらう。けれどもそれらの勞賃論は、その内容に於てなほ粗笨の形を脱しなかつたが、それは彼等が斷片的に他の實際上の諸問題、政策に關聯して述べられたに由るのであつて、勞賃論それ自らを一つの學問的な關心事として論究することは、なほ彼等の試み得ざることであつた。彼等は勞賃の現象を統一的全體の對立的構成要素の一つとして取扱ふことがない。即ちそれを近世資本制生産關係に歴史的に特有なる、不可分部的なる現象と見、依つて以て全面的に社會の本質的構造を把握することができない。彼等は勞賃、賃勞働の本質を利潤、資本との對立的關係に於て見出し得ない。結局具體的には勞賃を勞働力なる一つの特種商品の再生産費として十分に規定することができなかつたのである。彼等の經濟學は、勞賃論は、なほ封建的色彩に十分に蔽はれてゐたところのマニユファクチュア時代の理論的表現である。

たゞベテイに於ては、その他の彼れの文言と照し合はせ見る時、勞賃を資本との對立的關係に於て見たるが如き跡がないでもない。即ち剩餘價值の萌芽を見出すことができないでもない。マルクスに依れば、さきに引用したるベテイの文章(後半)からして次の如く解釋することができるとしてゐる。¹⁾ 即ち若し勞働者が六時間の勞働に對して六時間の價值を受取るならば、——彼は現今十二時間の勞働に對して六時間の價值を受取つてゐるのであるが——その現今受取れるところの二倍を受取ることになる。だから勞働の價值は必要生活資料によつて決定され、勞働者はどう

1) Marx, Theorien I, S. 3.

ぞうぞ生活して行く丈けのものを受くるために、止むを得ず彼れの處置し得るところの勞働力の全部を消費するといふことにより、剩餘價值の生産、剩餘勞働の作業をせざるを得ないのである。

なほベティは剩餘價值を地代と利子とに分ち、さうして後者を前者より導き出したのであるから、ベティが所謂剩餘價值は地代に外ならないのであつて、フイジオクラートの場合に於ける純收入とは同じものである。

二　フイジオクラートの勞賃論

メルカンチリズムの批評に於て起り、フイジオクラートの先驅者といはるゝ所の右のベティ以下の勞賃論は、第十七世紀の後半佛蘭西の國土に於て蔚然たる勢力を學問界實際界に振ひたるフイジオクラートに依つて繼承せられたるものであつて、後世の史家がこの勞賃の生存費説を、やゝ整ひたる形に於て、チュルギーに見出すことはよく人の知るところである。フイジオクラートの主なる關心事であると同時に、經濟學史上三つの偉大なる歴史的功績を成すところのものは、彼等がその社會哲學として自然哲學を信奉したること、純收入の觀念を樹てたること、および『經濟表』に於てこの純收入が社會の三大階級の間に如何に流通するかを分析したることにあるが、これら彼等の經濟學説の背後には、勞賃の決定、資本の本質、剩餘價值の發生について、隨つて又資本家的生産關係の解剖について、可成り正しき見解を見出すことができるのである。即

ち彼等に於ては、資本家に賣るべき勞働力の外何物をも所有しないところの自由勞働者とそれを購買し剩餘價值の生産に従事するところの資本家との對立的關係、随つて資本制生産關係の本質は、意識的にしろ無意識にしろ、兎に角前提せられてゐる。もちろんそれは十分なる形に於てはないが。

勞賃の決定は資本制生産解剖の第一歩であるがゆゑに、私は先づこの節に於て勞賃の生存費説がフイジオクラートの主なる代表者に於て如何に取扱はれてゐるかを見ることにより彼等が資本制生産關係解剖分析の出發點を如何に出發したかを檢して見たいと思ふ。

ケネーは勞賃の決定を表面的に主要なる經濟學上の論題としなかつたけれども、彼れの學説の背後には常にこの勞賃の最低生産費説が横はつてゐる。例へば彼は云ふ——『工業製品の製造に従事する勞働者の所得と農夫が土地の耕作に使用するところの勞働者の所得とを比較すれば、吾々は、雙方の所得はこれら勞働者の生活資料に限定せられることを見出すであらう、更にこの所得は富の増加ではないこと、工業製品の價值は勞働者および商人が消費するところの生活資料の價值自身に比例すること、を見出すであらう。』¹⁾

『勞働者の勞賃を決定するものは、最初欲望の貨物の普通價格ではなからうか。』²⁾

更にケネーは直接税、關接税の問題に關聯してこの問題を論ずる。即ちケネーに従へば、純收入を獲得するものは地主階級のみであるから、租税は直接に地主に課すべきものである。といふのは租税を間接に地主以外の他の階級——生産的階級、不生産的階級に課しても、それは結局に

1) Quesnay, Grains, Oeuvres. p. 234-5.

2) Quesnay, Questions intéressantes, Oeuvres, p. 271.

於て地主の負擔に歸するものであるからであり、而もこの場合その經過に於て諸々の費用を要する丈けの損があるからである。彼れの詞に次のやうなものがある——『自分の勞賃にて生活してゐる勞働者の上に課せられる租税は、嚴密に言へば、傭主によつて支拂はるゝところの勞働に課せられる租税に外ならぬ。このことは恰も土地を耕す馬に對する課税が、その實、耕作それ自らの費用に對する課税であると同様であるであらう。』

勞賃は勞働者の最低生活資料の價格によりて決定せらるゝといふ勞賃説はケネーの學說に包含又は前提せられてゐるにしても、彼はこの勞賃論を理論的に述べるよりは、寧ろ勞賃が生活資料の價格に落ち行く現前の事實を與へられたるものとしてたゞ説述したに過ぎない。何故に然るか、如何なる機構により然るか、については、未だ説くところがなかつたのである。この最低生活費説をケネーよりはやゝ成形せる態様に於て論究したのはチユルゴーである。彼はその名著『富の形成および分配に關する考察』に於て左の如く述べてゐる。

『勞働者の勞賃は、勞働者間の競争のために、彼等の生活資料に限定せらるゝ。彼は單に糊口の資丈けを獲るに過ぎない——腕と勤勉としか有つて居らぬ單なる勞働者は、自分の苦役を他人に賣ることができなければ何物をも獲ることができぬ。彼はそれを高く或は廉く賣る。しかし乍らこの價格の high か廉いかは、彼れ自身に依つて定まるものではなく、勞働を買ふものと彼れとの合意によつて定まるものである。雇傭者は出来るだけ少なく支拂ふであらう。蓋し彼は多數の勞働者のうちから選擇することが出来るから、最も低廉に働くものを採用することになるからで

1) Quesnay, Notes sur les maximes, Oeuvres, par Onken, Paris, 1888, p. 338.

ある。その結果勞働者は相互競争して勞賃を引き下げること餘儀なくされる。凡ゆる勞働に於て、勞働者の勞賃は必要生活資料に限らるべきであり、又事實に於てもさうである。⁹¹⁾』

斯様にチュルゴーに在りては、勞賃は他の商品と同じやうに、需要供給の關係、即ち生きんがために勞働せんとするものと勞働者を雇ひ入れんとするものとの交換關係によつて定まるものであつて、その結果勞賃は止むを得ず勞働者の最低生活資料に落付かざるを得ないのである。而してこの需要供給により勞賃が最低生活資料の價格に歸着する機構をチュルゴーが人口の運動に求めたことは注目に値する。即ちチュルゴーに従へば、『一方に於て、高い勞賃は勞働者をして一層多く消費せしめ、彼等の安樂を増加せしむるものであるが。他方に於て、この安樂、この莫大なる勞賃は人口を刺戟し、土地の豐饒は外國人を誘ひ、人口を増加せしむる。而して人口の増加は、その人口が貨物の消費および賣買價值を支持するのに、順次に彼等の競争により勞賃を引き下げるものである。貨物の賣價、收入、給料、及び人口は相互依存の關係により結合せらるゝ事柄である。それらは自然の比例に従ふ平衡狀態にそれ自ら置かれるのであるが、この比例は商業と競争とが全く自由なる時、常に支持せらるゝものである。』⁹²⁾

なほチュルゴーやロックやケネーと同様に、勞働者はたゞどうぞ日常の生活資料だけしか得てゐないのであるから、彼等は租税を支拂ふことは出来ぬ、それは結局に於て地主階級に於て負擔せらるべきものであるとの見解を支持した。チュルゴーに在りては、あく迄も『勞賃を引き下げる競争は單なる人夫の勞賃をして彼等の生活必需品に迄下落せしむることは確なのであ

- 1) Turgot, Réflexions sur la formation et la distribution des riches, 1770. Oeuvres de Turgot, par Daire, Paris, 1844, tome I, p. 10.
- 2) Turgot, Observations sur la mémoire de M. Gaslin, Oeuvres, I, p. 438.

る。

勞賃の最低生活費説は右のケネー、チュルゴ¹⁾の外、ネツケル²⁾、デュボン・ド・ヌムール³⁾にも見出されるが、しかし最も成形せる態様に於て述べられてゐるのはチュルゴのそれであつて、後世彼れを目して勞賃鐵則説の父と指稱さるゝのはいわれなきことではない。

以上ケネー、チュルゴの勞賃論を吟味することにより、フイジオクラートの勞賃論の一斑を窺ひ知ることが出来たかと思ふ。それらの間には若干の出入異同があるが、今これが勞賃論の内容を敢て一般的に要約すれば左の如くなるであらう。

(一) 彼等が問題の對象としたのは、第十八世紀後半に於ける佛蘭西の資本主義的生産方法の初期の發達段階に於ける勞働者並びに勞賃であつて、それはマニユファクチュア、及び農業的資本制生産に於ける勞働者並びに勞賃である。

(二) 彼等に依れば、勞働者の報酬即ち勞賃は生理的に最低度の生活資料によつて定まるものであつて、そのうちには道德的文化的要素が含まれてゐない³⁾。それは絶對的永久的のものとせられ、時處に應じて可變的歴史的動的であるとせられてゐない。この觀念を發展せしめて勞働(力)の價值、價格を道德的文化的に要素によりても亦決定さるゝと意義づけるには經濟事象の更なる發達を必要とした。

(三) 彼等が問題としたるが如き勞賃現象は、資本家的生産關係に特有なる歴史的現象であること、彼等は意識してゐない。これは彼等の一般的態度の一つの現はれであつて、彼等が社會哲學と

1) Necker, Sur la Législation et le commerce des grains, 4e Partie, ch. VII. (拙稿『客觀的勞賃論の史的發展』本誌第十八卷第三號參照)

2) Dupont-de Nemours, Notes sur les oeuvres de Turgot, Paris 1844, par Daire, tome I. p. 69. (同上參照)

3) 尤もケネーには次のやうな詞が見出されるがそれはほんの輕い意味に用ひら

して一様に自然哲學を把持してゐたがためであらう。

(四) 彼等に於ては、價値の概念はなほ瞭にせらるゝところがないがゆゑに、勞賃は勞働(力)の價値、價格として理解せられてゐない。それは必要生活資料の價格、即ち或る一定の使用價値の分量として觀せられてゐるに過ぎない。

(五) 勞賃が何故に勞働者の最低生活費に歸着すべきかについては、チュルゴーが人口運動を以て若干述べてゐるが、十分であるとは云へぬ。勞賃の市場價格に自然價格との變動一致の機構を、一定の根據の下に科學的に論究したのはリカアドに始まる。

(六) この勞賃論は、彼等に在りては、一つの纏りたる彼等の經濟學の一部分を成すところのものであると云はんよりは、寧ろ彼等がかかる勞賃決定の現象を與へられたるものとして、何等かの日常緊要の問題に關聯せしめて論じたものに外ならない。随つて勞賃問題をそれ自ら一個の問題として論せず、且つ又資本家の生産關係に關聯せしめて(例へば資本、剩餘價値との對立的關係に於て)、意識的にその本質を論究しようとしなない。當時の課税問題その他日常の問題を論議するに當り、この種の勞賃論に觸れたのはその先驅者の場合に於けると同じやうに彼等フイジオクラートの一特徴である。

以上に於て見たるが如く、フイジオクラートの勞賃論はいろ／＼の點に於て未だ至らなかつたところがあつたにしても、その最低生活費説は、意識的にしろ無意識的にしろ、彼等の經濟學體系の基礎、出發點とせられてゐることは否定できない。次に問題としようとするところの純收入

れてゐるに過ぎないであらう。

“Sa subsistance consiste dans les biens qui lui sont nécessaires pour exister et ceux dont il peut jouir utilement pour sa conservation et pour son bonheur.” Quesnay's Oeuvres, p. 289 note.

説の如きもこの種の勞賃論を前提とすることによつてのみ甫めて導き出すことができたのである。マルクスの如きは『勞賃の最小限度は正しくフイジオクラートの心棒である、』とさへ言つてゐる。彼等の勞賃論は、その缺陷不十分にも拘はらず、純收入説を導き出すことを得たのである。

私は次にこの勞賃論に依據しつゝ、フイジオクラートは如何にしてその純收入説を展開し、以てその初期の發達段階に於ける資本家的生産關係を、如何なる程度に於て、解剖分析し得たかを論じて見たいと思ふ。

三　フイジオクラートの『純收入』

抑も資本家的生産方法が成立するがためには、一定の物質的生産力の發達を前提とすることは云ふ迄もないが、更にそれが成立の必然的條件として、一方に資本家の手にすでに或る程度の貨幣が蓄積せらるゝことを必要とするのみならず、他方に勞働力のほか何物をも所有せず、それを販賣することによりやうやくその日を糊するところの自由勞働者の一群を必要とする。即ち資本制生産の發生條件として勞働の對象的手段が勞働者より分離し、非勞働者（資本家）に歸屬することとを必要とする。かゝる場合、生産手段から引き離された勞働者はその日の生活を支持するがために、己れの勞働力を一つの商品として資本家に賣り渡さざるを得ないのであり、資本家はその商品を購入することにより剩餘價值（利潤）の生産に従事するものである。詳しく言へば、勞働力

の價值は他の商品の價值と同じやうに、それが再生産に必要な勞働の分量、即ち勞働者の生活資料の再生産に必要な勞働の分量によりて決定せらるゝものである。さうしてこの勞働力は資本家に買はれ、彼はそれを生産行程に於て消費することにより、その價值を償ふよりは、以上の價值を抽出するものであり、そしてそれは彼れの所得するところの剩餘價值を成す。即ちこの場合勞働力の價值とその評價との間に何等かの差異あることが必然的の條件である。かゝる意味に於て勞働力の價值決定は資本家的生産關係解剖の鍵である。

フイジオクラートの言へる如く、勞賃は勞働者の最低生活費用を償ふに過ぎないとするれば、若し勞働生産力が未だ甚だ幼稚であつて勞働者の生活資料をやうやく償ふに足らない場合でない限り、彼れの生産する生産物は彼れの勞賃より大である筈であるが、その剩餘生産物は果して一體何であるか、如何に處分せらるゝか、直ちに考へられねばならぬ。フイジオクラートの時代即ち第十八世紀の後半に於ける佛蘭西に在りては、勞働生産力の發達は未だ大したものではなかつたにしても、當時は兎も角産業革命の初期に這入り資本家的企業が行はれ始めた時代であるから、生産物は勞働者の生活資料を償ふてなほ多くの餘りがあつたことは云ふ迄もない。フイジオクラートの勞賃論、およびそれと對立的關係に於ける『純收入』の思想は、かゝる時代に際しての佛蘭西の農業(大農制)に於ける資本制生産方法の思维的反映である。

これだけのことを云つて置いて扱つてフイジオクラートの純收入説の問題に這入る。先づ初めにフイジオクラートの階級別、『純收入』の觀念の一斑を窺ひ、それに對する二様の批判態度を見た

る上、最後にその功績および不十分を、歴史的必然の事由の下に、評價、指摘するであらう。

フイジオクラートに従へば、社會には三つの階級がある。生産的階級 (le classe productive, productrice, ou cultivateurs)、地主階級 (le classe propriétaires, ou disponible)⁶、及び不生産的階級 (le classe stérile, ou des artisans, ou stipendée) 即ちこれである。生産的階級とは事實農業に従事するところの階級であつて、借地農業經營者及び農業労働者より成り、地主に地代を支拂ふものである。次に地主階級とは君主(支配者)、土地所有者及び十分の一税 (dîme) を徴集する人々 (décimateurs) から成る。最後に不生産的階級とは『農業に屬する勞働以外の凡ての勤勞及び勞働を提供するところの凡ての市民より成るものであつて、』それは主として工匠^{アトリエ}を包含してゐる。

今これから三つの階級を分別する標準如何を見んに、生産的階級とは、ケネーに依れば、『土地の耕作によつて國民の年々の富を再生産 (reproduire) し、農業労働の費用を前拂し、且つ年々地主の收入を支拂ふところの階級であり、』⁷「チュルゴーに従へば、『農夫は、その生活資料以上に、獨立にして任意に處分し得る富を蒐めるが、その富は、彼が買入れたのではなくして而も賣却するのである。だから彼は、その循環によつて社會の凡ての勞働に生氣を與へるところの富の唯一の源泉である。なぜなら彼は、その勞働が、その勞賃以上に産出するところの唯一のものであるから。』」⁸つまりこの階級に屬するものゝみが、純所得、純收入即ち剩餘生産物を生産するがゆゑに、生産的と呼ばれるのである。地主階級とは『生産的階級がその年々の前拂を償ひ、且つその事業財産を維

1) Turgot がこの階級を disponible と呼んだ理由次の如し —— “la seule qui, n'étant point attachée par le besoin de la subsistance à un travail particulier, puisse être employée aux besoins généraux de la société comme la guerre et l'administration de la justice,” Réflexions, § XV, Oeuvres. p. 14-5.

持するに必要なる一定の富を、彼等の年々の再生産から差引いた後、年々支拂ふところの所得又は純収入によつて生活¹⁾する階級を指す。不生産的階級とは生産的階級の供給の原料に對し單に彼等自身が消費する生活必需品だけの價值しか附加するを得ない階級であつて、ケネーに依れば、『工業生産物の價值は労働者および商人が消費する生活資料の價值に比例する。だから工匠は自分の労働で生産する生活資料と同じだけ消費することになる。それゆゑに工業生産物の生産には富の増加はないのだ。この生産物の價值はこの労働者が消費する生活資料の價格以上に増加することはないから』²⁾であり、チュルゴーに従へば、『この二種類の労働の間にはかういふ相違がある、即ち耕作者は、彼れ自身の勞賃に加ふるに、工匠および他の友給者の階級全體の支拂に充てられる收入を生産する。しかるに工匠は單に彼等の勞賃、即ち彼等の労働と交換に、土地生産物の彼等の分け前を受くるにすぎずして、何等收入を生産しないのである』³⁾

それゆゑに、彼等に於ては、地主階級、不生産的階級の福祉は生産階級の獲得する純収入の大々如何に依存する。純収入がなければ、全社會の機構は震撼せしめらるゝであらうし、それが少ければ全社會の繁盛は期待さるべくもないであらう。『全人類の繁盛は最大の純収入と結びついてゐる。』⁴⁾

なほフイジオクラートに於ては、かゝる事物の状態は、決して遠き昔より永遠に不變に存続して來たものではない。それは、或る一定の歴史的時期に於て、一方土地は全都一部階級に獨占せられ、他方土地を占有せざる數多の自由労働者が發生するに至りて、甫めて現はるゝ現象であ

2) Quesnay, Analyse du tableau économique, Oeuvres. p. 306.
3) Turgot, Réflexions, § vii, Oeuvres. p. 11 (チュルゴーは嚴密なる意味に於てはフイジオクラートと云へないかも知れない。がフイジオクラートに於ては彼に於て最も發達したる形に達したのであるから、この論文に於てフイジオクラートにはチュルゴーが含まれてゐると承知したい。)

る。即ちチュルゴーに依れば、『土地は人々を以て満たされ、人はそれを漸次開墾する。最良の土地は終には凡て占有せらるゝことゝなる。最後に來たものには、最初のものが放棄した不毛の土地しか残されない。しかし終には凡ての土地はその所有者を見出し、土地を所有し得ざる者は賃銀階級として雇傭され、その筋肉勞働と農地所有者の財貨の餘分とを交換するより外に途がないのである。』¹⁾

之を要するに、フイジオクラートに従へば、彼等の主張にはその間に若干の出入があるが、大略に於て同じ、農業勞働のみが純收入を造るがゆゑに唯一の生産的勞働たるのであり、従つて又地代が純收入の唯一の形態たるのである。しかるにこれに反し工業に於ける勞働は、資料を農業から受けてその形態を變ずることゝまり、その資料を増加するものではない。尤もこの場合工業勞働者はその生産の行程の間消費するところの生活資料、——それは彼が農業から受取る——勞賃だけは、その資料に價值を附加するのであるが、彼等に在りては地代それ自身が一つの分れであるところの個有の資本利潤なるものは存在しない。利潤は地主が支拂ふところの一種の高等なる勞賃と見られてゐる。即ちそれは資本家が收入として消費するものであり（随つて普通の勞働者の勞賃と同様彼等の生活費を成す）、たゞ資本家が生産行程に於て粗生原料を新生產物に轉化する間消費するその消費費用を成すといふ意味にて、粗生資料にそれだけ價值を増加するのみである。次に貨幣利子も、彼等に於ては、本來的の利潤の一つの分れとして把持せられてゐないので、或るフイジオクラート例へば老ミラボの如きは、それを自然に悖る高利であるとして

- 1) Quesnay, *ibid.*, p. 378.
- 2) Quesnay, *Maximes, Oeuvres*, p. 233-4.
- 3) Turgot, *Réflexions, Oeuvres*, p. 15.
- 4) Dupont de Nemours, *Gide, Histoire*, p. 14 に據る。
- 5) Turgot, *Réflexions, Oeuvres*, p. 12.

ゐる。これに反してチユルゴーはその正當性を主張したのであつたが、兎に角彼等に於ては、貨幣利子の本源は正當に追究せられてゐない。詰る所彼等に於ては、利潤の一般的形態は地代であつて、産業利潤、貨幣利子は地代が地主から他の階級に分配せられたるものに外ならない。

以上はフイジオクラートの階級観、純收入説の一斑であつて、彼等はこれらの觀念を基礎としてかの有名なる財の循環を説いたのであるが、この純收入観に對しては經濟學史全然相反せる二つの批判態度がある。

云ふ迄もなくその一つはこの純收入説を全然否定し、それに何等の歴史的重要な認めざらんとするものであつて、セイ以後多くの學者の探るところの態度である。この批評をさるものに依れば、價值は主觀的效用であり、生産的とはこの效用を生産することであるから、フイジオクラートのやうに農業勞働のみが生産的であるとなし、他の工業、商業、自由職業その他に於ける勞働を不生産的であるとするは明らかに誤である。これらの勞働も吾人に效用を齎らす限り等しく生産的である。だから『フイジオクラートの意味に於ける純收入は一の迷想であり』、『原生産が唯一の生産的なものであるとするケネーの根本思想は確に誤つてゐる』のである。この批判態度は從來多くの學史家のところであつて、屢々紹介せられてゐることであるからこゝには詳しく述べない。

しかるに他の一つは純收入説を不十分乍らもよく當時の經濟社會の基本的關係の分析に資し得

- 1) cf. Marx, Theorien, I. S.
- 2) Gide, Histoire des doctrines économiques, p. 18.
- 3) Spann, Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre, S. 52.

たるものとして、それが歴史的意義を高揚せんとするものであつて、客觀學派（特にマルクス¹⁾）の等しくところの態度である。以下私は主としてこの態度に追蹤してこの純收入説の長所を見ると共にその欠陥を指摘して見たいと思ふ。先づその長所、功績から見ると。

(一) フイジオクラートが純收入——剩餘價值を生産する勞働のみを生産的であるとしたことは當に彼等の功績の一つである。彼等に於ては、生産物を生産するに消費つくされる價值量より、大なる價值量がその生産物に含まれてゐる場合、そこに剩餘價值が発生したのである。換言すれば粗生資料の價值が與へられたる場合、勞働力の價值が勞賃に等しければ、この剩餘價值は勞働者が勞賃として受取る勞働分量を超えて資本家——地主に與へる勞働の超過から成り立つものである。彼等は十分明らかにかう云ふ風に説明することはできなかつたが、それでも剩餘價值の成立を甫めて學問的に説いたのは彼等である。

(二) 右と密接に關聯せることであるが、彼等が純收入——剩餘價值の泉源をメルカンチリストの如く流通行程に於てなしに、生産行程に於て見出し、そこに資本家的生産の基本的關係の分析に一步を踏み出したことは彼等の歴史的貢獻の最も大なるものである。

(三) 我等は純收入を不十分乍らも彼等の勞賃論との對立的關係に於て全面的に見た。即ちさきにも述べたるが如く、純收入説には、暗黙の裡に「勞賃の生存費説——農業勞働者の勞賃は云ふ迄もなく、農夫（農業企業家）の利潤と雖も彼等に在つては一種の勞賃を出でない——」が前提せられてゐる。この態度あるに依つて、彼等はいかの有名なる資本の流通過程を把握し得たのである。

1) cf. Marx, Theorien, I, S. 33 ff.

(四) 彼等が純収入の發生、循環は生産そのもの、自然的必然より發し、彼等の意思、政策その他から獨立せるものとして客觀的に見たることは、次に述ぶるやうな欠陥を有つにしても、亦半面に於て彼等學說の一つの長所を成す。チュルゴー曰く、『それ(農夫の勞働)は、名譽、或は尊嚴の第一位であるわけではない。それは物理的必然(nécessité physique)である』¹⁾。

(五) 彼等が、特にチコルギーが、三大階級の別、純収入の發生を、一方の階級に於ける土地全部の獨占私有並びに他方の階級に於ける土地の無私有——勞働力のみを所有——に求めたことは、近代資本家的生産關係發生の基本的條件——土地と勞働者との離隔——をよく説いたことを意味する。

フイジオクラートの純収入觀は右のやうな長所、重要を有つてゐるにしても、同時に至らなかつた諸々の點、矛盾に充てる見解を併せ有つことを免れなかつた。私は左にその主要なるものを列擧するであらう。

(一) フイジオクラートに在りては、地代が純収入——剩餘價值の唯一の形態であつて、そこから他の利潤、利子が派生せられてゐる(勿論十分にその二者の關係が連絡づけられてゐるとは云へないが)。産業利潤は個有の一般的剩餘價值の形態であり、地代、貨幣利子は利潤の各々地主、貨幣資本家に分配せられたるものにすぎない、とせられてゐない。だから彼等に於ては、農業(勞働)のみが生産的であり、等しく剩餘價值を生産するところの工業(勞働)は生産的であるとせられてゐない。

1) Turgot, Réflexions, Oeuvres, p. 9.

(二) 彼等には明確なる價値の概念が不足してゐる。彼等の問題　するところは、人類活動の或る一定の社會的存在形式たる價値ではなく、資料、土地、自然およびその資料の變形から成り立つところの自然物である。随つて純收入説に於てもかゝる意味の價値の生産、流通として解せられず、自然の資料、素材の生産、流通として解せられる。即ち彼等に在りては、勞働者はその販賣するところの勞働力の價値の再生産に必要な社會的勞働時間を超えて働く、だから彼れの生産するところの價値は、彼れの勞働力の價値より大である。その差額は即ち純收入である、といふ風に説明せられてゐない。彼等が自然法觀を把持したことゝの必然的結果である。

(三) 右のことはフイジオクラートが一般的に當時の自然哲學をその社會哲學として採つたがため、凡ゆる現象、事物の状態をその社會性、歴史性に於て十分に把握し得なかつたことに因る。即ち純收入の生産、流通は社會の或る一定の歴史的發達段階に於てのみ見受けらるゝ現象である。とせず、抽象的に凡ゆる社會現象を通じて等しく存在するところの現象であるとせらる。純收入は彼等に於ては、社會的歴史的實在ではなく、單に自然の賜 (don) なのである。この態度は、その後スミス、リカードによりいくらか承け繼がれ、その地代論に於て時折現はれてゐる。

(四) 純收入説を勞賃の生存費説との對立的關係に於て、その本質を把握したとはいふものゝ、この二者は明確に或る統一體の對立物として認識せられたといふわけではない。一般勞働者は彼等の意識的問題の視野から除外されてゐる。随つて彼等に在りては、勞働階級は資本家階級と社會の二大階級を成すのではなく、たゞ産業的勞働に従事する社會内に於ける一階級——他のもう

一の階級は企業家、工業主であつて大資本を擁し、これを前貸して利殖してゐるもの——を成すにすぎない。¹⁾

斯様にフイジオクラートの純收入説には不十分なる諸點が存在するのであるが、そのうち地代が純收入説の唯一の形式とせられてゐることはその最も主なる缺陷とすべきであらう。しかし彼等がかく剩餘價值の一般的固有の形態として産業利潤を選ばずして、地代を選んだことには何等かの理由がなければならぬ。そこには何等かの必然的な理由が存在するであらうか？ マルクスはこれに答ふるに左の諸理由を以てしてゐる。²⁾ 吾々は次にそれを見なければならぬ。

(一)たとひ價值の原理を深く了得せずとも、農業生産に於ては剩餘價值が實質的に明瞭に現はれてゐるので、容易にその存在を認識し得る。だが工業に於てはさうではない。

勞働力の價值とその評價——勞働力の購買によつて雇傭者が獲得するところの剩餘價值——との差額は、農業即ち原始生産に於て最も明瞭に矛盾することなくして現はれてゐる。即ち勞働者が年々消費するところの生活資料、その使用價值の額は、彼が生産するところの生活資料即ちその使用價值の總額より尠いことは極めて自明であるから、勞働價值の性質をよく了解し得ずとも地代の剩餘たることを認識することはさして困難ではない。ところが工業に於ては、勞働者は直接生活資料を生産しないし、又それを超過せる生活資料をも勿論生産しない。こゝに於てはその剩餘價值發生の過程は、購買と販賣とにより、即ち流通の諸々の作用により媒介せられ、従つてその過程の理解には是非とも正しい價值の分析を必要とするのである。價值の性質をよく分析し

1) Turgot, Réflexions, Oeuvres, p. 39.

2) Marx, Theorien, S. 38-40.

得なかつたフイジオクラートに剩餘價值の一般的形態としての固有の剩餘價值の觀念が見出されるのはもとより自然なのである。

(二) 農業に於ては地代は剩餘價值の第三の形式として、即ち工業に於ては存在しないか又はそこでは素通りしてしまふに過ぎない剩餘價值の一形式として現はれる。それは剩餘價值(利潤)を超過した剩餘價值、即ち剩餘價值の最も明瞭なる形式、自乗せられたる剩餘價值である。これフイジオクラートが地代を唯一の剩餘價值の形式としたる所以の二。

(三) 外國貿易を離れて考ふる時——それはフイジオクラートが資本家的社會を抽象的に考察するがために當に正しく爲したことであり又爲さねばならなかつたことであるが、——工業その他の部門に従事し、農業から離れてゐる労働者數の大小は、即ちステュワートの言つた自由労働者數の大小は、農業労働者が自己の消費を超えて生産する農業生産物の分量により決定せられる。詳しく言へば、農業労働者はたゞに自己の部門の剩餘労働に對してのみならず、他の凡ゆる労働部門の獨立に對しての、随つて又そこに造られたる剩餘労働に對しての、自然的基礎を成すのであるから、價值の内容として、抽象的労働、その尺度としての労働時間が把握せられないで、一般的に定まれる具體的労働が把握せられる限りに於ては、農業労働が剩餘價值の創出者として把持せられざるを得ないのは尤である。チュルギーに依れば、『農夫は他の労働者の労働なくともやつて行けるが、しかし労働者は若し労働者が彼を生活させなければ、一人として生活することは出来ぬ』のであり、同じくケネーに従へば『生産的階級は自身の労働の結果それ自らにより生存す

ることが出来るが、不生産的階級は自分獨りでは、その不生産的な勞働により何等の生活資料をも獲得することはできない。」

(四) 剩餘價值(相對的絶對的)の發生は勞働の或る一定程度の勞働生産力に依存してゐる。若し勞働生産力の發達が幼稚であつて、一人の勞働者の勞働時間を以てしては、自分の生活資料を生産し、再生産し得るに十分であるに過ぎない時には、剩餘勞働もなければ剩餘價值もなく、随つて又勞働力の價值とその評價との差額がありやうわけではない。剩餘勞働、價值が發生するがためには必ずや一定程度以上の勞働生産力の發達を必要とし、勞働者の生活資料を超えてなは幾分かの剩餘生産物がなければならぬ。しかるにフイジオクラートの時代は云ふ迄もなく農業生産がその大部分を支配した時代であるが、この時代には今なほ勞働生産力は人智に依るよりも寧ろ、より多く自然の力に依存したのであるから、その勞働生産力が勞働者の生活支持より、多くの剩餘を生出したにしろ、それは大したものではなく、剩餘勞働(價值)は自然の賜と觀せられ、勞働生産力は自然の生産力と同視せらるゝのは自然である。

(五) フイジオクラートの偉大、特質は價值、剩餘價值を流通行程からではなしに、生産行程から導き出したのであるが、彼等は、必然的に、メリカンチリズムに反對して、交換、流通行程から離れて考へられ、さうして人と人との間の交換でなしに、人と自然との間の交換を前提とするところの生産行程から出發した。その必然的結果は農業勞働のみを生産的とすることになる。

斯様にフイジオクラートは剩餘價值の形式として地代のみを見、農業勞働のみを生産的勞働と看做したのであり、その他剩餘價值の分析、説明に於ていろ／＼の不十分を有つにしても、

そしてそれにはそれ相當に歴史的必然があるのであるが——兎も角實質上剩餘價値の發生を生産行程に於て見出したのであつて、ケネーはこの純收入説をかく提立、前提することによつて、かの有名なる財（資本）の循環過程を分析し、以て近代資本家的生産、流通の過程を市めて全體的に解剖し得たのである。

以上に於て見るが如く、フイジオクラートに在りては、三つの階級があり、純收入説が説かれたのであるが、彼等はこの事實を自然の秩序に本づくものであるとなすがゆゑに、地主階級の存在、純收入の獲得を非議せず、それが永久的存在を肯定するのである。即ち彼等は當時の大地主階級の辯護者であり、その經濟學は土地資本主義の經濟學であつたと云へる。この學說に本づき、彼等はコルベル主義に反對して、政府の干渉を排し、自由放任政策 *laissez faire laissez aller* を採ることが、結局地主階級は云ふ迄もなく、社會の全階級の福祉を増進する唯一の途と考へたのであつたが、その結果としては、彼等の意思に反して、反對の現象を惹起するに至つたことを見るのは頗る興味がある。彼等の意思は資本家的地主の存在、純收入の割取の正當づけにあつたが、自由放任主義、單稅論の結果は、漸次新興工業資本家階級の勃興を見るに至り、地主階級はその勢力を失墜するに至つたものである。それ故に彼等の純收入説の矛盾欠陥、その封建的色調と資本家的色調との交錯混淆は當時の矛盾に充てる經濟事態の様相の思惟的表現であると共に、半面彼等の矛盾せる學說、主張、政策は反對に當時の經濟の必然的な歴史的進行を促進することゝなつたものである。リカア드의經濟學が、彼れの意思に反して、彼れの後社會主義の理論に利用せられ、そして實際に於て歴史的進行に諸々の影響を及ぼしたやうに。

四 結 語

以上私は、先づ最初にフイジオクラート（及びその先驅者）の勞賃論を吟味することにより、彼等が資本家的生産關係解剖の出發點を如何に出發したかを見んと欲し、さうしてそれを彼等の勞賃の生存費説に見出したのであるが、更にフイジオクラートの始祖たるケネーの財（資本）の循環論の前提となれるところの純收入説を吟味することによつて、彼等がこの基本的な二つの理論を有機的に對立連關せしめつゝ、如何に當時の社會の基本的關係を分析解剖し、以てそれが本質を如何にその全體性に於て把握し得たかを不十分乍ら見たのである。

抑々フイジオクラートに先だつところのメルカンチリストは、富の源泉を流通行程に於てのみ見出さんと欲し、貨幣、金銀のみを重視し、貿易、商業を唯一の生産的なものとしたのであるが、——彼等に依れば、富、剩餘價值は一國內には發生せず、國と國との間に於てのみ發生する。それは相對的性質のものである——この態度はたゞ資本家的生産の外面的なる現象の分析に終始し、それが內的機構、連絡を解剖闡明することはなほ彼等の及ばざる所であつた。

しかるにメルカンチリズムの批判に於て起つたところのフイジオクラートに及んで、分析は流通過程より生産過程に移され、富、生産勞働は流通過程に於て實現するが發生はしないとせられて、資本家的生産の本質的關係の眞の解剖は甫めてこゝに開始せらるゝに至つたものである。

既に述べたるが如く、フイジオクラートは勞賃の結局は生活資料に歸着するの事實、純收入、地代の存在は『自然の秩序』に本づくものであるとなし、それらを歴史的なる生産關係上特有なる

現象と見得なかつたがゆゑに、資本家的社會の分析に於て幾多の不十分を残すことゝなつたが、しかし兎も角彼等が、一方に於て勞賃の生存費説を支持し、他方に於て純收入を生産過程に於て見出し、農業生産を生産的であるとしたことは、臆げ乍らも、すでに資本家的生産の本質的關係を可成りによく瞭らかならしめたものと云はねばならない。即ち彼等の經濟學には、資本家的生産發生、存続の基本的條件として勞働と土地とが分離せられ、そしてその物的生産手段は或る一定の階級——地主階級に屬し、勞働者は自己の勞働力以外何物をも所有し得ずして、この二つの階級は利害相對立する關係にあることが、暗黙の裡に、前提せられてゐる。随つて地主は一種の資本家であり、剩餘價値の占有者であるに反し、勞働者は自由勞働者としてたゞその日常の生活資料に相當するだけの勞賃を受けるにすぎずして、それ以上の剩餘生産物は地主階級に占有せられる、といふ認識が、不十分乍らも、含まれてゐる。つまりそこ彼は當時の資本家的生産——佛蘭西に於ける大農制の下に於ける資本家的生産——の機構を、ナイーフなる形に於てにし、正當に解剖闡明ならしめ得たのである。しかるにも拘はらずフイジオクラートが、一方に於て勞働者を意識的に資本家的賃勞働者として問題とせず、他方に於て純收入をたゞ農業生産に於てのみ見出し、地代を剩餘價値の唯一の形態となし、而もそれを自然の賜と看做し、一定の社會關係に求め得なかつたのは、當時はなほ資本家的生産がその生誕の時期に在り、その封建的色彩がなほ全く剝落するに至らず、剩餘生産物はたゞ主として農業生産部門に於てのみ視るを得たと共に、勞働者はなほ封建的主従の關係に固着することが多かつたがために、資本家的生産をその固有の形に於て批判的に分析解剖することは到底不可能のことであつたからである。フイジオクラ

トの勞賃論、純收入説、それらに本づく資本家的生産の解剖は、當に當時の資本家的生産の發達階段、即ち今なほ封建的の外被から全く逸脱し得なかつたその初期の發達階段に於ける矛盾に満てる過渡的様相の思惟的反映である。マルクスはこの事實を哲學の發達——哲學は初めて宗教的意識形態のうちから構成せられたものであるが、そしてそれゆゑにそれは一方に於て宗教を宗教としては拒否してはゐるが、他方に於てなほそれはこの理想化されたる、そして思想のうちに溶解せられたる宗教的世界にありてのみ積極的に活動してゐる——には、該當すると云つてゐる。

しからば次にそこにては凡ゆる經濟學の理論が隅々迄も行き亘つたのみならず、個々の經濟理論が深く科學的に取扱はるゝに至つたけれども、その半面に於て經濟現象を全面的に統一説明することから漸次離るゝに至つたところの、そして佛蘭西と異なり工業、商業の支配國たる英國に生まれたるところの、スミスの經濟學に於ては、この勞賃論、純收入説に本づくところの資本家的生産關係の本質の闡明は如何なる程度に迄開展したであらうか？ それとも逆に退歩したのであらうか？ 即ちスミスは勞賃を或る與へられたる一定のものと規定して出發し得たか、富、剩餘勞働、價值の發生をメルカンチリストと同じく英國に生れ乍ら、なほ且つ流通過程に於てはなしに、生産過程に於て見出したか、又それを獨り農業生産部門に於てのみならず、凡ゆる他の生産部門に於ても等しく發見したか、即ち生産的活動、勞働を一般性に於て認識し得たか、かくてこれらの認識に本づき、彼は資本家的生産を全體性に於て克く把握し得たか否か？ これらの問題の一部分は既に不十分乍ら私の論究したる所であるが、¹⁾その殘されたる他の諸問題については、追つて他の機會に於て吟味する所あるであらう。(完)

1) 本誌前々號所載摘篇『アダム・スミスの勞賃論』